

特別支援学級における国語科の異学年同教材学習

— ICT を活用し、児童の学年に応じた目標達成を図る授業実践をととして —

古田翔太郎（熊本市立麻生田小学校）

概要：本実践は、自閉症・情緒障害特別支援学級において異学年が同教材をととして学年に応じた学習目標やねらいを達成する国語科の授業実践である。実践の中で、課題を自分ごととして捉えられるよう単元を計画したり、考えを深めるために思考ツールを用いたりした。また、題材が目標にならないよう教科書に立ち戻り、児童が学年に応じて身につけるべき目標を確認し、学習を進めた。特別支援学級においても主体的・対話的で深い学びや社会に開かれた教育課程の実現が重要であり、そのための授業づくりについて検証した。

キーワード：タブレット端末、異学年、思考ツール、特別支援教育、社会に開かれた教育課程

1 はじめに

近年、特別支援学級の在籍数が増加している。これは、文部科学省『特別支援教育資料』によると、小学校特別支援学級在籍児童数が2009年5月の93,488人に対し、2019年5月に199,564人と約2倍となったことから分かる。また、『公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律』で、特別支援学級は1学級8人以下で編成されるが、在籍数増加から、学級内で異学年児童の在籍が増加している。

堀田龍也氏は、木村明憲著『単元縦断×教科横断』で『子どもたち自身が課題を自分ごととして捉え、自分たちなりに情報を収集し、整理し、友だちなどの他者と対話する中で表現し、考えを更新し、学び方の精度を少しずつ向上させていくようなサイクルを授業の中に組み込むことが望まれます。』と述べている。また、そのために単元全体を見通した教材研究を行う『単元縦断型授業』の必要性も述べている。

これらのことから、単元縦断型授業で学習を計画し、異学年児童がお互いの学習経験を生かして学び合い、学習目標を達成できると考えた。

2017年3月告示の学習指導要領総則では、学習の基盤となる資質・能力に『情報活用能力』を位置付けた。ICT機器が発達し、基本的な操

作、情報の収集・整理・発信が大切であり、それは特別支援学級児童においても同様である。

また、同総則は、『社会に開かれた教育課程の実現』も位置付けている。熊本市内の特別支援学級在籍児童は、原則、居住校区内の学校に通学するため、特別支援学級の児童も自分の住む社会・地域に目を向け、必要に応じて自分たちの思考を発信する必要性が考えられる。

これらのことから、特別支援学級でもICT機器を活用して情報の収集・整理をし、自分たちの住む社会・地域に発信を行うことで、主体的・対話的で深い学びができると考えた。

以上のことから、本実践では、自閉症・情緒障害特別支援学級における「国語科」の授業において、異学年児童が学習し、ICT機器を活用して発信を行うことで、学習目標を達成するとともに、主体的・対話的で深い学びや社会に開かれた教育課程の実現を目指す授業づくりの効果を明らかにすることとした。

2 研究の方法

(1) 対象学級の実態

本学級は自閉症・情緒障害特別支援学級であり、3年生2人、4年生1人、6年生2人の児童5人が在籍する。概ね知的な遅れが見られず、

当該学年の学習を行う。また、ほぼ毎日放課後等児童デイサービスに通う児童もおり、放課後や休日に屋外で遊んだり、校区内を歩いたりする経験が少ない児童が多い。紙に鉛筆で文字を書くことが苦手な児童も多い。

また今年度、臨時休校期間中から1人1台の端末による遠隔授業等において、さまざまな学習におけるICT活用を行い、端末の基本的な操作は概ね自分で行える。

(2) 調査対象および調査時期

①実施期間：2020年10月

②指導の手続き

授業は、当該学級にて行った。授業は、5人全員で行うことを原則としたが、一部の授業においては学年別に授業を実施した。

③単元とねらい・目標

国語科における単元と目標を表1に示す。

表1 各学年における国語科の単元と目標

学年	単元名	目標
3	自分の考えをつたえよう	読み手に伝わるように、自分の考えとそれを支える理由を明らかにして文章を書くことができる。
4	「ふるさとの食」を伝えよう	自分が考える良さとその理由や事例との関係を明確にして、文章を書くことができる。
6	町の未来をえがこう	自分の考えを伝えるために、構成を工夫したり資料を活用したりするなどの工夫をして発表する。

上記目標を基にし、本実践では全学年が「麻生田のまちについて考え、発信する」を題材にし、身につける目標を確認して学習を進めた。

④指導計画

指導計画を表2に示す。

表2 授業の指導計画

期	学習活動	時
I	今の自分と麻生田のまちを知る	3
II	麻生田のよいところ/かえりたいところを考える	1
III	つたえ方を考える	3
IV	自分たちの考えをつたえる	—

I期では麻生田のまちの既有知識から、さらに知るためにタブレット端末を持参して校区を歩いた。また、II期では思考ツールを用いて分類し、思考を深めた。III・IV期には地域住民に発信することを目標に方法を考えた。

(3) 分析方法

授業中の様子を撮影し、分析した。また、児童の発言要旨を黒板に記載し、分析に活用した。

分析は、熊本市小・中学校情報教育研究会が示す「研究の視点」に基づいて行う。研究の視点は次のとおりである。

- ①目的意識をもって学習に取り組むことができるようにするための工夫
- ②必要に応じて、他者と対話をしながら自分の考えを広げることができるようにするための工夫
- ③深い学びを生み出すための振り返りの工夫
- ④情報活用能力を育成するための工夫

3 結果

(1) 視点1：目的意識をもって学習に取り組むことができるようにするための工夫

①学習を「自分ごと」にする

児童にとって、学習内容が自分に身近なものとなるよう、授業では、麻生田のまちについて、よいところとよりよくすべきところ（う～んなところ）について尋ねることから始めた。すると、意見は出してくれたが、児童は「まだたくさんではない」「もっとありそう」と発言した。

児童の意見を、表3に示す。

表3 麻生田のまちの現状

よいところ	変えるべきところ
<ul style="list-style-type: none"> ・バスが通っている ・公園・球場がある ・病院がある ・小さいお店がある ・食事のお店がある ・商店・本屋がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学がない (専門の勉強はできない) ・高校のことをよく知らない ・新しい店がほしい

また、児童が「できたら、もっとよいまちにしたい」や「よいところを伝えたい」と発言し、

まちの現状を自分が発信し、少しでもまちの魅力が伝わったり、まちのよくないところを改善できたりすると考えた。発信を目的にし、主体的に学ぶことができている様子でもあった。

これは、児童の振り返りの言葉からも分かる。振り返りシートの一部を図1に示す。

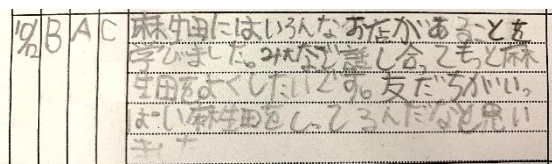


図1 児童の振り返りシート1 (一部)

②実際に校区を歩いて考えを深める

筆者は、児童の実態から、実際に校区を歩き、新たな発見ができると思い、校区を歩いて調べる学習を計画していた。麻生田のまちの、もっとよいところやよりよくすべきところを発見することを目的とした。

校区のすべてを回ることはできなかったが、新たな発見ができた。また、タブレット端末を持参し、事前に「写真を撮りたい時は先生に言ったら撮っていいですよ」と伝え、安全に配慮し、子ども自ら写真を撮ることができた。

また、撮った写真の分類に思考ツールを用いたことで、視覚的に分かりやすくなると同時に、児童が「麻生田のまちにはいいところがいっぱいある」と感じる事ができた」と発言する様子も見られ、考えの深まりが見られた。

児童が製作した思考ツールを図2に示す。



図2 思考ツールによる分類シート

③教科書に立ち戻る

学習を進めると、児童は「麻生田のまちについて考え、発信する」ことが目標となり、本来学ぶべき目標を見失った。そこで、教科書を読み、学習ポイントや自身が気をつけるポイントを考えた。そのことで、児童が本来の目標を意識し、発信する文章や動画などの作成時に、教科書を資料として活用する様子が見られた。

考えたポイントを図3に示す。

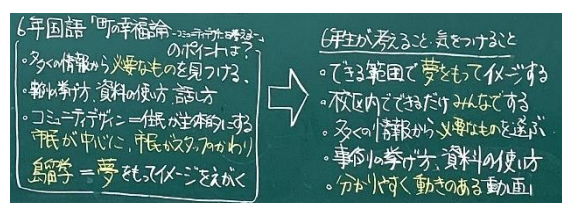


図3 教科書から気づいたポイント (一部)

(2) 視点2：必要に応じて、他者と対話しながら自分の考えを広げることができるようにするための工夫

①他者の言動で気づく

校区を歩いた際に、6年生が「あ、これはよいところですね。」と発言した。すると、3、4年生も「そうだね。」「あ、そうか、ここもか。」と気づき、写真に収めることができた。

また、6年生が地域に発信する動画を作成する際、より適切な写真を3年生が撮っており、3年生に写真使用許可を取っていた。3、4年生の視点の写真の良さに気づくことができた。

②他者評価をとおして自分を深める

地域に発信する文章や動画等の制作物の完成後、お互いで見合い、奨励点や改善点を出し合った。これは、他者の視点でよりよくする目的もあるが、他者の作品を見ることで、自分の作品に取り入れられる点に気づき、よりよい制作物を作ることができることも目的にしている。

(3) 視点3：深い学びを生み出すための振り返りの工夫

①振り返りシートを振り返る

今回、振り返りシートを手書きにした。児童が苦手な鉛筆で文字を書く経験をすると同時に、

書いた内容を振り返り、達成感や学びの充実感を味わうことを目的にした。児童は、毎時間の振り返りが積み重なり「ぼくはこんなに学んだ」と一目で分かるようにした。回を重ねる度に文量が増え、目標に迫る振り返りを目指せた。

児童の振り返りシートの一部を、図4に示す。

月 日	SABC 思・は・ん・表 ち・せ	ふりかえりコメント 学んだこと・できるようになったこと 次にかんがりたいこと・友だちから学んだこと	先生から				
			もっと書いて	理由を書いて	次のかたいは？ 何を学んだの？	よいふりかえりの びています！ がんばって！	すばらしい！
11月14日	AAS	かんたんにできたけれど、 あとで振り返りをして よかった。					
11月19日	CAA	まだできていないけれど、 がんばってやるといいよ。 がんばってやるといいよ。 がんばってやるといいよ。					
11月27日	AAA	まだできていないけれど、 がんばってやるといいよ。 がんばってやるといいよ。 がんばってやるといいよ。					
11月27日	AAA	まだできていないけれど、 がんばってやるといいよ。 がんばってやるといいよ。 がんばってやるといいよ。					

図4 児童の振り返りシート2 (一部)

(4) 視点4：情報活用能力を育成するための工夫

①今までに活用したアプリ・経験を思い出す

児童は今まで、学習シートをタブレット端末上で記入したり、写真を基に俳句や詩を作ったりした経験がある。これを基に、より効果的な表現方法を考えることができていた。

②既製作品を見て学ぶ

6年生が動画を用いて発信する際に、「動画はどうやって作るのですか」と尋ねてきた。そこで、熊本市が製作した観光PR動画を視聴した。すると、映像や音楽、人の表情に着目できた。アプリの操作習得も必要であるが、既製作品のよさを感じて、取り入れる大切さも感じた。

4 考察

今回の結果をとおして、次のことが分かった。

- ・身近な課題を考えたことで、課題解決に主体性が生まれ、課題が自分ごとになった。
- ・特別支援教育で重要な実体験を通した学びや思考ツールでの視覚化は、目的意識を鮮明にもつ手助けとなり、学びの深まりが見られた。

- ・異学年が同教材で学び合うことで、異なる視点が広がり、より適した課題解決ができた。
- ・振り返りシートの積み重ねにより俯瞰的に振り返りができ、学びに向かう意欲が生まれた。
- ・ICT 機器活用の経験や既製作品から考える活動をとおして、より適した課題解決ができた。

5 結論

以上のことから、自閉症・情緒障害特別支援学級における「国語科」の授業において、異学年児童が単元縦断的に学習し、ICT機器を活用して発信を行うことで、学習目標を達成するとともに、主体的・対話的で深い学びや社会に開かれた教育課程の実現を目指す授業づくりには一定の効果があることが分かった。

6 課題

今回の課題として、次のことが挙げられる。

- ・学習の見通しがもてるようにしたが、校区を歩く際に、発信まで考えた撮影は難しかった。特性のある児童への手立てが十分必要である。
 - ・学習の振り返りにおいて、自己評価を行ったが、児童によって評価に差があり、変化があまり見られなかった。自己評価の在り方や自己を見つめる方法を学ぶ経験が必要である。
 - ・異学年が同じ題材で目標をもって学習できる単元とそうでない単元があり、分類と回を重ねた実施による効果の検討が必要である。
- これらを踏まえ、今後もさまざまな実践から、異学年が協働し学び合う姿勢を図りたい。

参考文献

- 文部科学省（2019）特別支援教育資料
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1406456_00008.html（最終確認日：2020年10月25日）
- 木村明憲著、黒上晴夫・堀田龍也監修（2020）
 単元縦断×教科横断 主体的な学びを引き出す9つのステップ さくら社
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領